

遊具で楽しく遊ぼう

～なわで遊ぶ～

青森保育所（あおいもり園）

執筆担当者：木下 怜美、熊澤 咲子

キーワード：なわあそび 興味・関心 あそびの展開

I. はじめに

昨今、子どもの体力不足が社会問題化されており、私たち青森保育所でも園児の事故のケースにおいて、身体機能が未熟なために転倒などのケガが起こりやすいのが現状にある。

以前も体力向上や調整力に着目し、そこではヨガや柔軟性を養う運動遊びを取り入れた研究に取り組んできたなかで、子ども達が遊ぶ遊具を使うことにより運動機能の向上ができないだろうか考えた。近年の小学校との交流から、小学生がなわとびをしている姿を見学した。その姿に刺激され、5歳児はもとより、4・3・2歳児までもがなわに興味を持ち始めていることから、遊具の中でもなわにテーマを置いてみることにした。



II. 研究の目的

発達段階においてある程度の運動機能

(ジャンプする、ものをしっかり掴むなど)が備わってくる時期から、なわが飛べるようになるまでの過程を記録していく。段階として、

1. なわについて興味・関心を持ち、色々ななわあそびを通して、なわに親しむ。
2. 保育者の手を借りながらなわを飛んでみようとする。

この2段階を第一目標として取り組む。

※ 最終目標は、年長児となった時の姿として、自分でなわとびをしようとし、色々な飛び方に挑戦してやることをねらいとする。

III. 研究の方法

対象3歳児 20名

1. 色々ななわあそびを提供する
 - ・朝夕の遊びの時間
 - ・クラスでの活動時間(月1回)
2. 子どもの姿を観察、記録する。

IV. 事例と考察

初めに、なわだけを提供し子どもたちがどのような反応をするのか様子を見た。



なわで遊べるということで「やったー！」と喜ぶ子が多かった。様子を見てみると、年長児の真似をして跳ぼうとする子が多かったが、結局跳べないのでつまらなくなり、飽きてしまっていた。兄弟がいる子や年長児のなわとびをする姿を見ている子がおおいので「なわ=跳ぶ」という意識が根付いてしまっているようだった。しばらく遊んでいると、一人の子が自分で考えたのか電車を作って遊び始め、なわで輪を作り「おふろ」と言って入っていたり同じものでも「スケート(リング)」と言って遊んでいた。

【この活動からわかったこと】

遊び方を伝えない状況で自由に遊ばせても他の子は模倣するばかりで、あそびを展開できたのはごく少数の子だけだった。いかに発想することが難しいか、遊びに対し

て受け身であることかと改めて痛感した。

これを踏まえ、なわあそびについて興味を示し、やってみようとするにはどのような働き掛けが必要かを考えた。運動遊びの文献を参考にし、子どもたちが興味を持ちやすい遊びを提供、姿を観察していき、年度末に再び自由に遊ばせた時の姿を比較する。

提供した、なわあそびの中から4つの事例を挙げ、考察していく。

① なわわたり



初めてでも、やり方を教えると楽しんで遊んでおり、やりたくないという子はいなかったが、なわが細いこともあり、足全体でなわを踏むことができないのでバランスを崩しやすく、なわから外れてしまう子が多かった。



それでも保育者が応援することで意欲が

増したのか、足をつきながらもゴールまで行くと「よっしゃ！」と喜び、はだし保育期間中に行くと、「いたーい！」と言いつつも足への刺激を楽しんでいた。保育者側も、「痛いところに当たるようにしてみてね、そうすると上手に歩けるよ！」と声をかけると、子どもたちは「いたい、いたい」と言いつつも、足裏の感触を楽しみ、何度も行っていた。

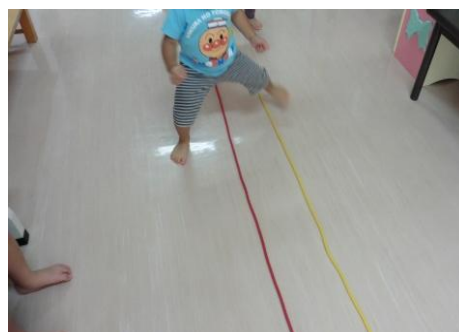
新しく入所した子の中で、なわが交差していたり円状になっていると道筋どおりに進むことができない子がいた。その子は今までに、なわに触れる機会や経験がないことからなわをたどっていくことを理解するのに長い時間を要した。初めは保育者から遊び方を聞いても理解できず、「なんかできないな、やりたくないな」という気持ちになったのか自分から取り組む姿は見られずに、しばらくその姿は続いたが、次第に周りができるようになってきて、「私もやってみよう」と思うようになって1回、2回と参加するようになって、現在は拙いながらもやってみようとする姿も見られるようになった。

【この活動からわかったこと】

“早くゴールして褒められたい！”という気持ちから雑になってしまいがちだったので「落ちちゃった子はわにさんが食べに行くからね～」と保育者が食べるまねをしてかかわってみた。ゲーム感覚で楽しんで取り組むことができ、何回も挑戦することで出来るようになった子も多かった。なわ自体を固定しているわけではないので、遊んでいるうちになわの軌道がぐにやぐにやになっていると、「えーっ！」と言いつつも

も楽しんで行っていた。保育者とともに行った「わに」も楽しかったのか「たべられるー！」といいながら渡っていく子もいた。

② 両足とび・けんけんぱ



どちらも簡単な動作なことから「やる！」と7割ほどの子が参加しに来たが、簡単な動作であるがゆえに雑になってしまいがちだった。「けんけん」のときにバランスを崩してしまい、「ぱ」の時に両足を同時に付くことが出来なかったり、両足ジャンプも足が開いてしまう子やなわを踏みつけながら跳んでいってしまったりする子が多かった。

跳び方を丁寧に教えてもらい、何度も挑戦して一度もなわを踏まずに行けた時には「やったー！」「先生、一回も踏まなかったよ！」と教えに来る姿だった。経験を重ねる事で、両足でしっかり飛んだり、着地する事ができるようになる姿が目に見えて分かり、「〇〇ちゃん、上手になったね」と言葉かけると子ども自身も自信につながったようで笑顔が見られていた。

【この活動からわかったこと】

うまくバランスをとることと、両足にしっかり体重をかけることがまだ難しい様子だったが、バランスを崩して転んでもすぐ

に起き上がって挑戦する姿がほとんどだった。なわを踏んでしまっても、転んでしまってもゴールまでいくことで達成感を感じて繰り返し取り組む姿がみられていた。

③ なわひき



初めは興味がないのか5人ほどの参加で、ひっぱりあってもすぐに力がなくなって離れてしまったり、転んでしまう姿だった。

クラス内での活動では力が拮抗しており、お互いに勝ったり負けたりすることで「もう一回！」と競争のように行うことが多かったが、対して朝夕の活動では、異年齢児との合同保育となるので、年長児と組み、勝ち負けというよりは、ひっぱられる感覚や引きずられてしまうことを喜んでいる姿だった。

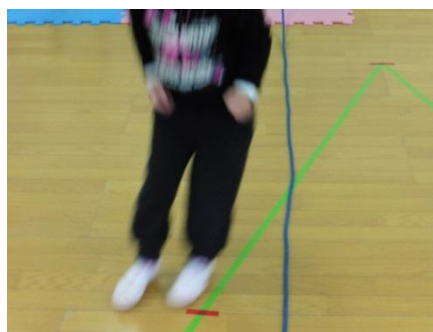
回を重ねることによって、周りの子も「なんだろう…?」「たのしそうだな」と参加する子が増え、現在は6割ほどが積極的

に参加するようになった。慣れてくると子ども同士だけでなく、保育者とも一緒に楽しむようになり、「〇〇先生やろう!」「負けないからね」と意気込んで参加する子ども見られた。「先生、今日なわひきやる?」「今日はなわひきやりたいな〜!」と子どもたちから声を掛けてくることも多くなっている。

[この活動からわかったこと]

この活動はクラス内で行った時と、朝夕の活動の時に行ったときとは子どもたちの反応が違ったことが印象深かった。同じ活動でも、異年齢児と一緒に取り組むことで楽しさを見出し、そこから同年齢児とも楽しむことができるようになったり、相手が必要になる活動なので、友だち同士で会話をしたり、競い合うことから楽しさを感じているようだった。

④ ながなわ



前段階として、基本の動きとして両足をそろえて跳ぶこと、床に置いた縄を境目として左右に跳ぶこと、保育者がなわを動かし、自分のところに来たら跳ぶことを伝えたが、なかなか難しいようだった。できないながらも保育者が動かすなわが近づいてくると「きゃー」と喜びながら跳び、普段はなわあそびに興味のない子も楽しんで参加することができていた。

初めて保育者がながなわを回して跳ばせたときは、前段階で行った左右跳びが強く印象に残ったのか連続して跳ぶことはむずかしい様子だった。なわを跳ぶためにいつジャンプすればいいのか、タイミングがまったくつかめておらず、足になわが当たってからやっとジャンプする子も見られていたが、保育者が子どものタイミングに合わせて『跳ばせてあげる』ことで子ども自身は「跳べた！やったー！」と喜びを感じていて、繰り返し挑戦する子がほとんどだった。なわあそびに興味のない子は1・2回繰り返し跳ぶものの、その後は自分の好きな遊びに行ってしまう、なかなか持続はしないが、以前であれば声をかけても来ない姿だったので、少しでも興味が出てきた様子が感じられた。初めて活動に取り入れた日、子ども自身で跳ぶことができたのは20人中1人だった。

自分のタイミングをつかんで跳ぶことができるようになってきた中で、興味深かったのが、その子によってタイミングの取り方が全く違う、ということである。一般的には『タン・ウン・タン・ウン』と裏拍を感じながらリズムカルに跳ぶが、子ども達のなかには『タンタンタン・タンタンタン』と3拍子のリズムで跳ぼうとする子もいた。

先にも述べたが、なわの左右を跳ぶということが子どもたちの印象として大きく残っているためか、なかなか連続して跳ぶ、ということが出来なかった。しかし、活動の中でなわを左右に揺らすのみの場合と、ぐるぐるとまわした場合では同じ子でも姿が異なる事に気づいた。左右に揺らすだけでは子どもの身体は一定の場所で跳ぶことが出来ず保育者がタイミングを合わせないと跳べないのだが、ぐるぐる回すと子どもの身体は一定の場所で跳び続ける事ができていた。ぐるぐる回すと子ども自身がなわを目で追えなくなる分、自分のタイミングを掴もうとしてその場で跳べるようになるのではないかと考えられる。

【この活動からわかったこと】

一人ひとりが跳び方について試行錯誤している姿をとらえ、保育者はあえてタイミングの指導はせず、保育者側が子どものリズムに合わせることにした。繰り返し跳び、上手にタイミングを掴んで跳ぶことができるようになっていく姿からは、「跳べた！」「もっとたくさん跳びたい！」という子ども達の意欲も強く感じる事ができた。

また、なわを左右に揺らす時とぐるぐる回す時の跳び方の違いを見て、担当者の中ではぐるぐる回すのはまず左右に揺らすなわを跳べるようになってから、という認識が強かったためにこの事例は担当者の考えを大きく変える結果となった。

【子どもの意欲の移り変わり】

年度末に再度、子どもたちになわだけを提供し、どのような反応をするのか観察した。



4月同様、お風呂を作ったり、まっすぐに置いて両足ジャンプを楽しむ子もいたが、中でもブロックを組み合わせて犬やネズミを作り、それになわをくくりつけて「散歩してるの！」という子もいれば、ブロックの穴になわを通して『カラフルヘビ』をつくる子もいた。なわ通しをしている子はブロックがいっぱいになり、これ以上通せないという状態になると新しいなわを持ってきて新しく始めたり、ながなわの5メートルほどにもなるくらい通して遊ぶ姿も見られた。(女兒3名で30分以上行っていた)固定遊具の柱にかけて押し引きしてみたり色々な遊具や玩具との組み合わせてみたりと、創造力が豊かになってきたように感じられる。提供したなわあそびで遊ぶ子、自ら考えて遊ぶ子、友だちと工夫しながら遊びを進めていく子など、様々な姿がみられ、1時間ほどの活動を終え、「片づけようか」と声をかけると、「え～もうちょっとやりたい！」との声も聞かれていた。

【エピソード】

1：Aくんの場合。

Aくんはもともと運動が苦手な男の子で、運動あそびをするときにはうまくできないことから緊張したり、なかなか一歩踏み出せない性格である。あるとき朝夕の遊びの一つとして「けんけんぱ」を設定した。ふとAくんを見ると、汗をかきながらじっくり取り組む姿が見られ、それは片付けが行われる時間までずっと続いていた。遊びが終わってから、「Aくん、今日はずーっとけんけんぱしてたね！つかれたでしょ」と声を掛けると「だってね、ちょっとできるようになったからね、がんばったんだ」と嬉しそうに答えていた。運動が決して得意ではないAくんが、自分で出来るようになったことで「もっとやってみよう！」と感じ、今回の姿に至ったことに担当者も嬉しく感じた一場面だった。

2：Bくんの場合

Bくんは、運動も好きだが、それよりもブロックで剣や車を作ったりすることが好きで、なかなか活動には参加しない子だった。クラス内でのながなわでは保育者にタイミングを掴んでもらいながらやっとながなわを出すと、いつもは一目散にブロックで遊び始めるBくんがながなわの列に並んでいた。「いらっしやい！まてたよ！」と保育者が話し掛けると「きょうたんぼぼさん(3歳児クラス)でね、ながなわやって、B、とべたから！」と得意げに答えていた。この日をきっかけに、朝夕の遊びの時間にながなわを設定するとほとんどの時間参加し、繰り返し行う事で自分でタイミングを

掴み跳べるようにもなった。さらに年長児が跳んだ回数を競い合う『なわとび(ひとりとび)チャレンジ』を見て、「Bも、あれやってみよう！先生！Bも出来る??」と聞いてくる姿も見られた。そこへ、年長児がやってきて「もうちょっと上手になったらだよ！すみれさん(4歳児クラス)になったらかなあ?」と話しが始まり、Bくんは残念そうにしながらもまたなわに何度も挑戦しにいく姿だった。

[エピソードからわかったこと]

初めは決して運動が得意なわけでもなく、なわに興味があるわけでもなかったが、なわにふれ、実際に出来る喜びから、なわあそびの意欲につながっていることが見て取る事ができる。さらに年長児とのかかわりによってひとりとびへの期待感や意欲も感じられた。

V. まとめ

なわとびを跳べるようになるまでの姿として今年度はまずなわに興味を持ってもらうこと、「またやりたい!」「なんだか楽しそうだな」と思わせる遊びを提供し、展開していくこととした。研究の中では子どもの興味がなかなか向かないもの、身体機能的に難しいものもあり、また、なわ=なわとびではないとしながらも運動機能を重視した遊びに傾きがちであったことも強く感じ担当者自身もなわという遊具でのあそび方や展開に行き詰ることもあった。しかし、なわに興味を持った子ども達の中には年中、年長児のようになわ、ひとりとびに挑戦しようとする姿も見られるようになってきており、初めは20人中1人しか跳べな

かったなわも3月の時点で6人となった。もちろん対象児すべてが興味を持ち、毎回積極的に取り組んだ、というわけではない。しかしこの研究を進めるなかで、いままで興味のなかったなわにふれ、色々ななわあそびを経験することで「もっとやってみよう」「なわっておもしろい!」と感じ、取り組みに参加する子がひとりでも増えたことは事実であり、最終目標であるなわとびで運動機能の向上に一歩前進することができた。対象児の中には家庭に帰ってからなわとびで遊んでいるという子や、初めてなわにふれたときには全く遊べなかった子が自分なりの遊びかたを見つけて楽しむことができるようになった子も多く見られている。このようになわに興味をもち楽しく遊ぶ子ども達の姿を温かく見守りながら目標に向け、無理なくステップアップしていけるようかかわっていきたい。

【参考文献】

- ・『幼児期運動指針』
幼児期運動指針策定委員会 (2012)
- ・山口 智之著『幼児体育 応用編』
幼少年体育振興協会 (2006)
- ・黒井 信隆/山本 秀人編著
『0～5歳児の楽しい運動あそび』
いかだ社 (2010)
- ・片山 喜章/ケロポンズ編著
『遊びたっぷり
一年中ベストセレクション』
ひかりのくに (2012)